

句読点などの記号/操作 の用法についての スタイルガイドの分析

渡邊晃一郎*、宮田玲、影浦峽、関根聡
東京大学影浦研/理化学研究所AIP LIAT



発表の概要

1. 背景と目的
2. 研究手法
3. 分析の結果
4. 結論と今後の展開

1. 背景と目的

- a. 研究対象
- b. 既存研究
- c. 課題
- d. 目的: 研究の位置付け

1-a. 研究対象

- ピリオドなどの記号やイタリック体化などの操作(記号/操作)
- 記号の機能: Parkes (1992)
 - 文法的な構造の明示
 - ニュアンスの伝達
- では、そもそもどのような“ニュアンス”があるのか

1-b. 既存研究

- 既存研究で行われてきたこと
 - 歴史的な変遷の記述
 - 文学作品における用法の記述
 - 言語学的な分析
- 記号/操作の用法の体系的な整理はなされてこなかった
 - どのような観点から記号/操作の用法は記述されるのか
 - 複数の分野を横断するという意味で、全体としてどのような用法があるのか

Meyer (1987)

- 言語学的な分析: 統語論、意味論、音韻論
- スタイルガイドの分析を行いその不足を指摘
 - “Style manuals obscure the fact that individual usage is one manifestation of a more general function of punctuation: its use to mark **grammatical** hierarchies.” (p. 112)
- 課題: この3つの枠組みで十分であるのか

1-C. 課題

- 参照点となる記述の不在
 - 記号/操作の用法を分析するときに、どのような観
点が必要なのか
 - 文法
 - 意味
 - 語彙

1-d. 目的

- 参照点を構成する規範の整理を行うために、スタイルガイドにおける記号/操作の用法の記述の整理を行う
- スタイルガイドが規範として位置づけられる
 - APA: “APA Style provides a foundation for effective scholarly communication because it helps authors present their ideas in a clear, concise, and organized manner.”

1-d. 研究の位置付け

- 本研究で扱う問
 1. どのような観点からスタイルガイドでの記号/操作の用法の記述はなされているのか
 2. 各記号/操作について、どのような用法が全体としてあるのか
- この2つの問に答えることを通じて、記号/操作の用法を横断的かつ体系的に整理することで、本研究は記号/操作の用法の記述の分析の参照点を構成する

2. 研究手法

1. スタイルガイドから記号/操作の用法を記述した部分を抽出
2. 記述を類型化
 - 考慮されている観点を整理
 - 観点毎に用法を整理

2. 研究手法：記号/操作

- APAでPunctuationとして扱われているものを基本に選定(合計14個)
 - 記号11個
 - ピリオド
 - コンマ
 - コロン
 - セミコロン
 - Emダッシュ
 - Enダッシュ
 - スラッシュ
 - 引用符
 - 丸括弧
 - 角括弧
 - 波括弧
 - 操作3個
 - イタリック体化
 - 大文字化
 - 太字化

2. 研究手法：スタイルガイド

- 4つの分野から合計25冊

1. 学術分野： 11冊
2. ビジネス分野： 11冊
3. 報道分野： 1冊
4. 官公庁分野： 2冊

3. 結果

1. 用法の記述の観点の整理

- 3つの観点を設定し、各記述を分類
- 最大2階層で類型化
- 全記号/操作を合わせて798個を抽出し、83類型にまとめた

2. 特筆すべき点

記号/操作	観点	Level 1	Level 2	記号/操作	観点	Level 1	Level 2
ピリオド	対象	区切り	文末 リストの数字	引用符	対象	特殊な意味 直接引用 記事などのタイトル 造語や新語 言語表現への言及 語句の定義又は訳語	
		特定の記号の一部	省略形 十進法の位取り URL			強調 異主張の明示	
コンマ	対象	区切り	言語表現 数値	スラッシュ	対象	接続 特定の記号	
		特定の表現の後				特定の記号	
	目的	曖昧性の解消 省略の明示 代替の語句の提示 被定義語の導入 引用の導入 強調 休止		丸括弧	対象	文献の参照 ラベリング 思考の中断	
		括弧の代替				目的	説明 ミスリードの防止
コロソ	対象	言語表現の分割 比率		角括弧	対象	引用中の編集	
		結論の導入 引用の導入 リストの導入 説明の導入 強調 対話		波括弧	対象	数学的記号	
セミコロソ	目的	言語表現の分割 省略や要約の導入 思考の分析		イタリック体化	対象	語句の属性	他言語の語句 特定の語句 言語表現への言及 一般的でない語句 省略形
		言語表現の接続 改行				文書内の位置付け	定義される語句 序文 図中の文字
Em ダッシュ	目的	関係有	要約の導入 応答の明示 引用文献の提示 説明の導入 強調	大文字化	対象	統語論的属性	文頭 コロソの直後
		関係無	強調 語句の中断 匿名化 休止			語句の属性	固有名 特定の語句 省略形
En ダッシュ	目的	括弧の代替 “例えば”の代替 マイナス		太字化	対象	強調	
		語句の接続 不明な文字の代替				特定の語句 語句の最初の出現	
		関係の明示 代替可能 休止				強調	

表 1: 記号/操作の用法の類型

記号/操作	観点	Level 1	Level 2	記号/操作	観点	Level 1	Level 2
ピリオド	対象	文頭切り	文末 リストの数字	引用符	対象	特殊な意味	
		特定の記号の一部	省略形 十進法の位取り URL			直接引用 記事などのタイトル 造語や新語 言語表現への言及 語句の定義又は訳語	
コンマ	対象	文頭切り	言語表現 数値		目的	強調 異主張の明示	
	目的	特定の表現の後		スラッシュ	対象	接続 特定の記号	
		曖昧性の解消		丸括弧	対象	特定の記号 文献の参照 ラベリング	
		省略の明示			目的	思考の中断 説明	
	代替の語句の提示		角括弧	対象	引用中の編集		
	既定定義語の導入		波括弧	対象	数学的記号		
	引用の導入						
	強調						
	中止						
	参照	括弧の代替					
コロンの	対象	言語表現の分割					
	目的	議論の導入 引用の導入 リストの導入 説明の導入		イタリック体	対象	語句の属性	他言語の語句 特定の語句 言語表現への言及 一般的でない語句 省略形
セミコロン	対象	言語表現の分割			目的	文書内の位置付け	定義される語句 序文 図中の文字
	目的	省略や要約の導入 思考の分析					
Em ダッシュ	対象	言語表現の接続 改行			対象	流語論的属性	文頭 コロンの直後
	目的	関係有	要約の導入 応答の明示 引用文献の提示 説明の導入	大文字化	対象	語句の属性	固有名 特定の語句 省略形
		強調			目的	強調	
		関係無	強調 語句の中断 匿名化 休止		太字化	対象	特定の語句 語句の最初の出現
	参照	括弧の代替 “例えば”の代替			目的	強調	
En ダッシュ	対象	ハイナス 語句の接続 不明な文字の代替					
	目的	関係の明示 代替可能 中止					

表 1: 記号/操作の用法の類型

3. 結果：記述の観点

- 対象：記号/操作が与えられるもの
 - 統語論的属性(文頭など)、語句の属性(固有名など)
 - “The first word in a complete sentence” (APA)
- 目的：記号/操作が与えられる際に意図されること
 - 強調
 - “Capitals for emphasis” (Chicago)
- 参照：別の記号/操作を参照する形で記述
 - 参照は対象と目的とどのように記述するのかに言及している点で異なる
 - “Dashes set off paranthetical elements more sharply and emphatically than commas.” (Handbook of Technical Writing)

記号/操作	観点	Level 1	Level 2	記号/操作	観点	Level 1	Level 2
ピリオド	対象	区切り 特定の記号の一部	文末 リストの数字 省略形 十進法の位取り URL	引用符	対象	特殊な意味 直接引用 記事などのタイトル 造語や新語 言語表現への言及 語句の定義又は訳語	
	対象	区切り 特定の表現の後	言語表現 数値		目的	強調 異主張の明示	
コンマ	目的	曖昧性の解消 省略の明示 代替の語句の提示 被定義語の導入 引用の導入 強調 休止		スラッシュ	対象	接続 特定の記号	
	参照	括弧の代替		丸括弧	対象	特定の記号 文献の参照 ラベリング	
	対象	言語表現の分割 比率			目的	思考の中断 説明 ミスリードの防止	
	目的	結論の導入 引用の導入 リストの導入 説明の導入 強調 対話		角括弧	対象	引用中の編集	
コロンの	対象	言語表現の分割 省略や要約の導入 思考の分析		波括弧	対象	数学的記号	
	目的	言語表現の接続 改行		イタリック体化	対象	語句の属性 他言語の語句 特定の語句 言語表現への言及 一般的でない語句 省略形	
対象	関係有	要約の導入 応答の明示 引用文献の提示 説明の導入 強調	目的		強調	文書内の位置付け 定義される語句 序文 図中の文字	
セミコロン	目的	関係無	強調 語句の中断 匿名化 休止	大文字化	対象	統語論的属性 文頭 コロンの直後	
	参照	括弧の代替 “例えば”の代替			目的	強調	語句の属性 固有名 特定の語句 省略形
Em ダッシュ	対象	マイナス 語句の接続 不明な文字の代替		太字化	対象	特定の語句 語句の最初の出現	
	目的	関係の明示 代替可能 休止			目的	強調	
En ダッシュ	対象						
	目的						

表 1: 記号/操作の用法の類型

3. 分析の結果:特筆すべき点

- 分野ごとの独自性
- 記述(定義)の仕方の不統一性
- 文書レベルの枠組みの必要性

分野ごとの独自性

- 心理学特有の記述の存在
 - 引用符(APA) : “To present stimuli in the text”
 - 太字化(ACS): “Chemical structure identification”
- 分野毎の独自性の考慮の必要性を示唆

記述(定義)の仕方の不統一性

- イタリック体化(GPO)
 - “Emphasis, foreign words, and titles of publications”
 - “In nonlegal work *ante*, *post*, *infra*, and *supra* are italicized only when part of a legal citation.”
- 内包的定義と外延的定義の混在

文書レベルの枠組みの必要性

- イタリック体化について、対象の観点から記述される用法
 - 定義される語
 - 序文
- このような用法は文書の構成に関係する
- 内容、形式の両方において文書の構成を考慮した枠組みが用法の記述の分析に必要であることを示唆

3. 分析の結果：まとめ

1. 記号/操作の記述は主に対象と目的の観点からなされる
2. 記述には分野毎の独自性が存在する
3. 記述(定義)の仕方に不統一性が存在する
4. 既存研究で欠けていた文書の構成を考慮するような枠組みが必要である

4. 結論と今後の課題

1. 結論：本研究の成果

- 規範として示された記号/操作の記述そのものを、
観点を設定することで体系的に整理した

2. 今後の展開

- 実際の使用での記号/操作の用法の分類
- 記号/操作の用法の自動分類に展開